

# 図書館報

# 光丘

No.158



## 切り開く世界への旅

國學院大學教授

平藤 喜久子

子供の頃から図書館という空間が好きだった。酒田で過ごした小学校、中学校、高校。それぞれの学校図書館で読んだ面白かった本を挙げてと言われたら、すぐに書名が出てくる。とくに高校生の頃は、読み始めた本が面白くて、授業中にこっそりと机の下に隠しながらページをめくり、休み時間に急いで次の巻を借りに行ったりしたものだ。

大学生になると、図書館は本を借りて読むだけの空間ではなく、調べる、考える場にもなった。夏休みや冬休みで帰省したときには、市立図書館にもずいぶんとお世話になった。

その後大学院へと進学し、今は研究者として大学に職を得ている。現在の専門は神話学、宗教学。本との出会いは、研究の楽しさを教え、その幅を広げてくれた。本は、新たな世界への扉だと

思っている。図書館はその扉を何万、何十万と持つ空間ということになる。その図書館で、これまで数え切れない扉を開いてきたが、なかでも忘れられない出会いがある。

長年の研究テーマの一つに日本の神話がどう外国語に翻訳されてきたか、ということがある。日本が国際社会に本格的に参加し始めた一九世紀後半。おもにヨーロッパで日本への関心が高まり、古事記や日本書紀といった八世紀の文献も翻訳された。この研究をはじめたとき、英訳や独訳は簡単に手に入れられたが、仏訳の古事記、日本書紀がなかなか見つからない。ある地方の大学図書館にあることがわかり、その閲覧に出かけた。一九世紀末のフランス語訳日本書紀である。借り出して、コピーを取っていて途中で戸惑った。あ

るところから袋とじなのである。ヨーロッパでは、製本の仕方によって袋とじの状態で本が世に出されていた。乱丁落丁ではなく、「アソナット本」と言われているものである。しかしそれまで実際に自分が出会ったことはなかった。私が借りたその本は、誰かが途中で開いたもののようなのだ。図書館の方に許可を得て、ペーパーナイフでページを切り開いた。一九世紀のパリで刊行された印刷部数も少ない本。いま手の中にある一冊は、誰も開いたことがないのだ。緊張しつつナイフで切り開いてみると、

その先にはフランス語、漢字、ハンダ、インドのデーヴァ・ナーガリー文字などが入り乱れた、不思議な日本神話の世界が広がっていた。それは、日本に憧れながらも一度も来日できなかった、レオン・ド・ロニという人物が、訪仏した日本人や取り寄せた本から日本を学び、日本神話に独創的すぎる解釈を施して刊行した本であった。新たな研究テーマと出会った瞬間で

ある。

国際的な図書館の潮流に違わず、フランス国立図書館も近年蔵書のデジタル化を大幅に進め、ロニの本も日本にいながら簡単にダウンロードできるようになった。大変ありがたいことではあるのだが、図書館という空間で、緊張感を持ってページを切り開き、その先の世界と出会う感動を味わうこともまた、本の匂い、手触りを知ることともにかげがえのない体験なのではないだろうか。

新型ウイルスの感染拡大で、海外調査もできなくなっている。国内のほとんどの図書館も一時閉館した。他方でネットの利用が増え、本のデジタル版の提供も進んだ。いかにオンラインで調べ、研究するかを大学でも教えることになった。その利点はたしかに大きく、利用しない手はない。しかしたくさんの扉を持つ図書館で、ページを切り開いて新たな世界と出会う感動も、学生たちに伝えていきたいと思っている。

# 地域史料の保存について③ 北前船「客船帳」等史料について(二)

庄内酒田古文書館館長 杉原丈夫

江戸時代の飛鳥には、大坂や下関など全国津々浦々より沢山の船、即ち北前船が入港しました。

これまで長井政太郎博士の著作『飛鳥誌』などで北前船に関する研究がなされて

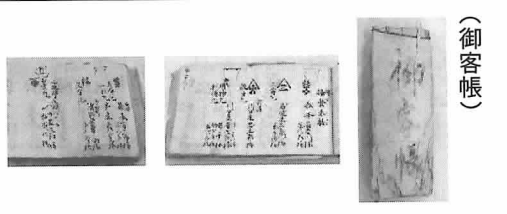
来ておりますが、客船帳など北前船などに関する史料は膨大なものです。当時活用した客船帳はじめ関連文書は飛鳥勝浦地区の鈴木家が所蔵していましたが、殆ど全て佐倉市にある国立歴史民

俗博物館に保存されるようになり、二〇年以上を経過しています。この博物館にある鈴木家文書の中の「客船帳」はおおよそ七〇点存在し、未だ活用が図られていない状況にありました。しかし、博物館に問い合わせして、全ての客船帳について閲覧及び撮影に応じて頂きました。

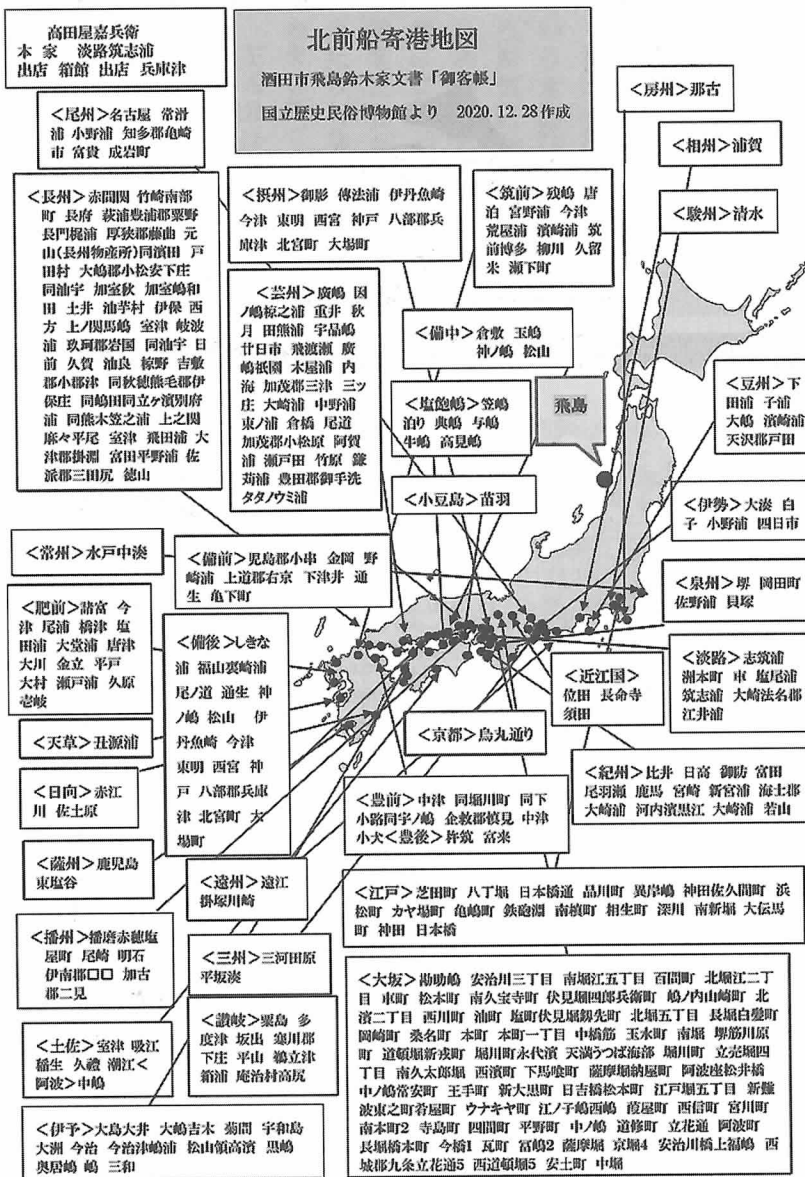
飛鳥勝浦村鈴木家は代々屋号が鈴木太郎右衛門を名乗り、勝浦村肝煎を務める傍ら法木・中村を含めた肝煎の代表である大組頭格の役職を歴任した家柄でした。

次に、鈴木家文書の客船帳ほか七〇点の関連文書を紹介いたします。

- ①「御客帳」「客船帳」など四一点
  - ②「客船早控帳」など二二一点
  - ③「客船祝儀帳その他」八一点
- 以上 合計七〇点
- 鈴木家文書「御客帳」で作成した寄港地図から、次のことが判明しました。
- 飛鳥にやって来た北前船の寄港地は九州・四国・山陽地方・大坂・近畿地方・太平洋側から江戸までの船が寄港していたことが分かります。
- 酒田湊のように、北海道松前から東北各地や日本海側の湊からの北前船は「下関より北奥州仙臺迄は別帳に記す」とあります。
- このことから飛鳥は独自のネットワークで各地の湊



- 播州播磨赤穂  
松本長左衛門様  
庄治郎様  
名波屋庄右衛門様  
三壽丸 甚兵衛様  
新濱川口屋忠五郎様  
観音丸  
川口屋幾四郎様  
明神丸 惣平様  
利徳丸 助四郎様  
善四郎様  
赤穂茶屋吉三郎様  
天神丸 与八郎様  
三社丸茶屋彦太夫様  
塩屋町濱野屋勇助様  
久吉丸  
赤穂尾崎村七二三  
利孝丸小川直太郎様  
中野武八様



酒田湊のように、北海道松前から東北各地や日本海側の湊からの北前船は「下関より北奥州仙臺迄は別帳に記す」とあります。

このことから飛鳥は独自のネットワークで各地の湊

後史料保存と同時に十分その活用が図られていかなければならないと考えます。

(客船帳等使用画像等は国立歴史民俗博物館所蔵史料で、翻刻及び北前船寄港地図は杉原作成)

# 戦前の酒田における映画館(4)

酒田市立図書館長 岩 浪 勝 彦

## ○中央座

上内匠町の三館が統合されたことにより、大正十一年(一九二二)四月八日に酒田演芸株式会社経営による「中央座」が中央館を洋風二階建てに改築するかたちで開館する。下内匠町の伊藤甚作施工によるこの建物の二階には柱がなく、当時としては最新の建築技術を用いたものであった。

開館時の上映作品は、チャップリンの「犬の生活」やルース・ローランド主演の連続活劇「ルスの冒険」、尾上松之助の「野次馬」などであった。

これにより、酒田の映画館は港座がそれまでの舞台公演を主として扱う劇場から映画専門館となる昭和十六年(一九四一)九月までの約二十年間、約一年弱の間だけ駅前で営業した第二酒田館を除き、中央座と下内匠町の酒田館の二館のみとなり、中



大正11年4月8日付け「酒田新聞」広告

央座が日活、酒田館が松竹の作品を上映していた。昭和六年(一九三一)五月には日活のトップスターで、モダンガールの代表的存在であった入江たか子(戦後は黒澤明の「椿三十郎」における伊藤雄之助演じる家老の奥方役が有名)が来て舞台挨拶をし、夜は相馬屋で新聞記者やファンを招いて座談会を開

催している。

この頃、映画は弁士による説明付きの無声から発声映画へと変革期に入り、酒田でも発声映画(トーキー)が開されるようになった。

中央座では昭和六年十月には初の本格的字幕付きトーキーの「モロッコ」を上映したほか、昭和七年(一九三二)四月末には酒田映画研究会主催でトーキー作品「間諜X27」、「パラマウント・オン・パレード」を上映するなど、酒田におけるトーキー公開の先鞭をつけたものの、発声機械の不具合により観客が音声を聞き取るこ

とができず大変な不評を買

い、配給元のパラマウント社と酒田映画研究会は新聞に陳謝広告を出している。このように昭和七年の時点ではまだ安定したトーキー作品の上映は技術的にまだ実現していなかったようである。

中央座も昭和八年三月に発声器(スピーカー)を設置し、昭和十年前後には日本の映画界も外国映画に遅れること数年で、ようやく発声映画の時代に入り、弁士や楽士

の失業等の激動の時代を迎えることになる。

なお、戦前の酒田には洋画専門館はなく、中央座と酒田館が日活や松竹の作品とともにハリウッド各社やヨーロッパの作品を上映していたが、昭和十四年十一月に酒田劇場が東宝直営館となった際には、松竹作品を上映する館が酒田にはなくなったため、翌年五月に中央座が松竹作品の上映権を取得している。

戦後の中央座は当初は日活、その後、東映の専門館として営業し、昭和二十二年に畳敷きを椅子席にしたほか、昭和二十八年十一月、翌二十

九年五月に改装を行い、二階には特別観覧席を設けたほか、二階正面にはバルコニーを設けている。また、二十八年の改装の際には舞台両袖に孔雀やリスなどの彫刻を施した巨大なガラス柱を配置し、これは京都松竹座のもの

を参考にしたもので当時の価格で一本十万円したものと

いう。

昭和五十一年(一九七六)十月の酒田大火で焼失・廃業したグリーンハウス、酒田大映と同様、焼失するまで営業を続け、酒田の映画館としては港座に次ぐ長さの営業期間である五十四年に渡る歴史を持つ映画館であった。



中央座の改築を伝える昭和28年11月8日付け「出羽新報」記事

# 子ども達が熱中して取り組む 「五色百人一首」

NPO法人教育力アップやまがた理事長 佐藤道子

「五色百人一首」とは

「五色百人一首」は、小倉百人一首を二十枚ずつ青、桃、黄、緑、橙の五色に色分けし、取り札の裏に上の句が書かれたもので、今から四十余年前、東京の小学校教師である向山洋一氏によって開発されました。

「五色百人一首」の良さ

百人一首は、全てひらがなで書かれているので、ひらがなが読めるようになったら幼児でも楽しめます。もちろん初めて取り組む大人でも二十枚ずつなら楽

に覚えることができます。

百人一首は、百枚全部読み上げると三十分以上かかりますが、二十枚なら五分もかかりません。ですから授業のすきま時間や帰りの会等に短時間で毎日できます。

「五色百人一首」は、男女一緒にみんなで遊べるので、クラスの男女の仲も良くなり、学級がまとまります。又、どの子も暗記力や集中力が高まり、成績も向上し、知的な学級づくりができます。ですから、卒業した後も子ども達ばかりか保護者にも感謝されます。

遊びながら暗記力も高まるので、脳細胞も活性化します。大人の脳トレにもいいかもしれません。又、全員がルールを守って遊ばなければならぬので、わがままは通用せず、いじめのない仲の良い学級づくりにはもってこいのアイテムです。



最近の子ども達はスマホやゲームで一人で遊ぶ事が多くなりました。数百年前から続いていた百人一首という伝統的な遊びを生活に取り入れることで、学校生活や家庭生活がどんなに豊かになることでしょうか。

「五色百人一首」のやり方

「五色百人一首」を学級でやると、子ども達はとても熱中し、「もう一回やろう。」「明日もやろう。」と百人一首コールが巻き起こります。一試合やる毎に対戦相手が変わり、一級ずつ上がった下がり下がりするので、子ども達は真剣です。

しかし、そうなるためには、若干のコツが必要です。

初めてやる時のやり方、机や札の並べ方、お手つきルール、教師の工夫した読み方、十七枚で終了することなど、札を購入するとやり方のマニュアルがついてきますので、その通りにやってみてください。

全国で「五色百人一首大会」

残念ながら、今年はコロナ禍のために開催できませんでしたでしたが、毎年五色百人一首の各都道府県大会や全国大会が行われています。山形県でも十五年前から「五色百人一首山形県大会」を開催してきました。

県内各地から参加した百人近い子ども達。どの子もそれぞれの学級ではトップクラスの腕前だったとみえ



て、〇・一秒、一枚を争う好試合が展開されました。中には一枚差で負けて悔し涙を流す子もいました。

五色百人一首で楽しさや悔しさを体験した子ども達の中には、酒田市総合文化センターで毎週行われている「酒田かるた会」に入会し、菅啓彦六段のご指導の下に、更に腕を磨いているお子さんもおられます。

「五色百人一首」は「教育技術研究所」や「アマゾン」「楽天」で一個千円(税込)で購入できます。

五色百人一首の世界を是非楽しんでみてください。



# 明治・大正期の少年雑誌

## 『少年世界』と『少年倶楽部』

酒田市立光丘文庫古典籍調査員 柏倉 由紀子

二〇二〇年は『鬼滅の刃』ブームでした。週刊少年漫画雑誌に連載されていたマンガですが、幅広い年齢層に受け入れられTVアニメ、映画共に大ヒットしました。

少年向けの雑誌が作られ始めたのは明治時代です。教育雑誌の色彩が強い『少年園』『小国民』に続いて、『娯楽の間に良徳を養い、愉快の裡に明智を得せしむべし』とエンターテインメント路線を謳った『少年世界』が創刊されたのは、明治二十八年（二八九五）でした。出版は博文館で、主筆に京都『日出新聞』の巖谷小波（本名・季男）を迎えます。内容は、巻頭に小波のお伽噺を載せ、論説・小説・史伝・科学・遊戯・文学・時事・投書欄など多彩で、森田思軒、若松賤子、田山花袋、泉鏡花、徳田秋声、押川春浪、幸田露伴らが執筆していました。

巖谷小波（一八七〇〜一九



『少年世界』明治41年9月号表紙と巖谷小波の「お伽太閤記」

三三三）は日本初の創作童話『こがね丸』を発表し、内外の昔話や名作を「お伽噺」として平易に書き改めて雑誌を通して日本中に広め、日本児童文学の先駆者と評されています。また俳人でもあり『俳諧文庫』他、俳句関連著書も多数あります。

小波は大正十年、親交の深かった酒田新聞の佐藤古夢（良次）の案内で、庄内のいくつもの小学校へ童話口演に訪れており、その道中記を『俳味紀行山から海』に「荘内の五日」として記しています。大正十五年には、再び古夢の先導で光丘文庫を訪れてい

ます。因みに小波の父である巖谷一六（修）は、近江水口藩士、貴族院議員で明治三大書家の一人であり、明治三十四年に酒田を訪れ翠松亭に泊まっています。明治二十七年庄内大地震の惨禍を刻んだ「甲午震災記念碑」（下日枝神社境内にあり）や、最上川治水工事監督・石井虎治郎の功績を称える「石井君治水紀功碑」（日和山公園にあり）の書を書いた人です。光丘文庫では『少年世界』明治三十四年一月号〜大正十五年十二月号までの五十七冊を所蔵しています。大正期に入ると『少年世界』は後発の雑誌に席巻され、部数を減らしていきます。

『少年倶楽部』は、大正三年（一九一四）に大日本雄弁会（現・講談社）が創刊し、敗戦後の一九四六年に少年クラブと改名して昭和三十七年（一九六二）まで、六一一冊刊行されました。実業之日本社『日本少年』（一九〇六年創刊）に発行部数で大差をつけられていた時、編集長に抜擢されたのが加藤謙一（一八九六〜一九七五）です。加藤は



『少年倶楽部』昭和17年6月号表紙と田河水泡の「のらくろ大陸行」

青森県弘前市の生まれで、貧しい暮らしの家でしたが、学校で優秀な成績をとった褒美に父から『少年世界』を買ってもらっていました。裕福な家ではか買えない高価な雑誌を大切に読み、大志を抱いていた人です。社長・野間清治の「雑誌は活字で売るもの。いい読み物を書く作家を捜しなさい。」という助言により、佐藤紅緑、吉川英治、高垣暉、佐々木邦、江戸川乱歩らの連載小説を揃え、大きく部数を伸ばします。また漫画を増やしたらどうかと佐藤紅緑にアドバイスされ、田河水泡の「のらくろ」や島田啓三「冒険ダン吉」を載せま

す。また厚紙を組み立てる工作付録も人気を集め、黄金時代を築きました。

『少年倶楽部』は、大衆的な雑誌とはいえ執筆陣は著名な作家・詩人が多く、小川未明、与謝野晶子、浜田広介、室生犀星、菊池寛、武者小路実篤らが登場しています。また川端康成、子母澤寛、井伏鱒二、大佛次郎といった光丘文庫を訪れた作家も書いていました。

戦後、本格的な漫画雑誌『少年』や『冒険王』が登場し、テレビを中心とする映像文化が主流になり、『少年倶楽部（クラブ）』は終刊となりました。光丘文庫には昭和十四年六月号〜昭和三十七年十二月号まで二一一冊を所蔵しています。

※参考文献

- 『財団法人光丘文庫史』
- 田村真一著 光丘文庫2018 『酒田市史年表改訂版』
- 酒田市史編纂委員会著 酒田市1988 『俳味紀行山から海』
- 巖谷小波著 博文館1921 『漫画少年』物語』
- 加藤丈夫著 都市出版2002



# 読者感想文

## 私に必要な百歩

酒田市立浜田小学校

六年 津田 海音



私は、「飛ぶための百歩」という本の「百歩」というところが気に入りまして。「飛ぶためだから、助走のことかな。」としたり、「なぜこの題名にしたんだろう。」と考えたりしながら、本を読み始めました。

主人公は、ルーチョという男の子です。ルーチョは、目が見えませんが、しかし、ルーチョは、あらゆることに積極的に立ち向かいます。私には、ルーチョのような勇氣は無

いので、「ルーチョと自分は違うな。」と思っていました。ただ、少し似ている部分もありました。それは、人に頼ることを、よくないことだと思っているところです。

そんなルーチョが、キアラという女の子と出会い、心を通わせていく中で、少しずつ変わっていきます。ルーチョもそうだったように、キアラの言葉の一つ一つは、私の心にも響いてきました。

キアラが、ルーチョに言った「人に頼らないで生きていく人はいない」という言葉は、特に私の胸につきささりました。この本を読む前は、算数の授業などで友達に質問できる子を見ると、「よく恥ずかしがらずに、友達に聞けるなあ。」と聞いていました。わからないことをさらけ出し、それを人に知られること、人に弱みを見せることは恥ずかしいと感じていたのです。でも、キアラやルーチョが、自分の弱さをさらけ出して、苦しんだり、成長したりしていく姿を見て、今ではそんな友達のことを尊敬できるようになりました。

私は、母にこの本を紹介しました。私の話を聞くと、母は、「人に手助けをしてもらったり、してあげたりすることとは、どの世界でも大事だよ。体が不自由だとか、スポーツの世界だとか特別な場面だけではなくて、日常生活でこそ大切なことだよ。」と話してくれました。その後、私は、母の言った言葉の意味を考えました。日常生活の中で、例えば私は、どんなことを手助けしたりされたりしているだろうか。考えると、たくさんのことが思いうかびました。授業中、休み時間、登下校中、家族とのかかわり、地域の方々とのふれあい……。数え上げればきりがありません。

私は、読みはじめた時に、「飛ぶための百歩」とはどんな意味なのかと考えていました。そして、本を読むにつれて、自分なりの考えを持つようになりました。それは、ルーチョが、「時には人に頼ることの大切さ」を知るまで

の歩数だと思いました。私も、その百歩が必要です。ルーチョ達のおかげで、もしかしたら、その歩数は五十歩で済むかもしれません。私は、これから「人に上手に頼ること」をがんばっていきます。そのためには、自分の弱さをさらけ出す勇氣を持ちたいです。そして、どれだけ自分がまわりの人から助けられているかを感じることに。それに感謝しながら、自分もたくさんの人を手助けしていくことを意識して生活していきます。

この機会には是非ご活用ください。

【執筆者紹介】  
 平藤 喜久子 (國學院大學教授)  
 杉原 丈夫 (庄内酒田古文書館館長)  
 岩浪 勝彦 (酒田市立図書館館長)  
 佐藤 道子 (NPO法人教育力アップ やまがた理事長)  
 柏倉 由紀子 (市立光丘文庫古典籍調査員)  
 津田 海音 (浜田小学校六年)

デザイン 佐藤 十 弥

発行

酒田市立中央図書館  
酒田市立光丘文庫

酒田市中央西町二番五九号  
酒田市中町一丁目四番一〇号

電話(24)二九九六番  
電話(22)〇五五一番

印刷 明徴出版(株)